

支社	TEL 06(9342)2601 Email osaka@decn.co.jp	大阪	TEL 011(261)7553 Email hokkaido@decn.co.jp
名古屋	TEL 052(261)9351 Email nagoya@decn.co.jp	北海道	TEL 043(222)4038 Email chiba@decn.co.jp
横浜	TEL 045(201)3821 Email yokohama@decn.co.jp	千葉	TEL 025(229)5411 Email hokuriku@decn.co.jp
関東	TEL 048(232)2551 Email kanto@decn.co.jp	北陸	TEL 082(221)7236 Email hirosima@decn.co.jp
関東	TEL 022(222)4222 Email tohoku@decn.co.jp	中国	TEL 087(827)5672 Email shikoku@decn.co.jp
東北	TEL 022(741)6331 Email kyusyu@decn.co.jp	四国	
九州			

日刊建設工業新聞

豊かな経験・最高の技術
 ロープ式・油圧式エレベーター設計・製作・据付・保守
 comfortable space
空間
横浜エレベータ株式会社
 横浜市中区松影町2-8-6 ☎045(662)1594(代表)
 http://www.yokohama-elevator.jp/

シャンデリアが下がっている

シャンデリアが天井から下がっている。外から2階内部がぞっくり見渡せる。震災で壁が落ちて今まで閉じられていた生活模様が一気に外部に晒されている。片流れ長屋形式の前面の壁は完全に落ちてしまっている。1階部分は2階の荷重に耐えかねて、完全に潰れている。天井は剥き出し、下地材は露出し、母屋が透けて見える。母屋の上にはたすき掛けの水平ブレースが渡っている。左側の界壁の破損断面が露わになっている。床には生活器具が散乱し、流し台が見える。シンクから配管がぶらさがっている。食卓や椅子が

震災の傷跡

10



転がり、天井やふところから電気配線の線がぶら下がっている。コードの先には器具のようなものが付いている。この住まいは2階がLDKのようだ。庶民のささやかな日常がここで営まれていたのだろう。つい昨日までの幸せな家族団欒のシーンがいっそう気の毒に思えてならない。

1階内部には見る影もない。多分寝室なのだろう。地震発生時刻は朝の5時46分だ。平気だったのだろうか。2階の床梁を支えられた床根太と下地板が見える。床梁を支える隅柱の右側に補強の仮柱が施されている。震災後の補強の跡か。家主の必死な気持ちが伝わってくる。

(神戸市東灘区住吉地区にて)

隔週火曜日に掲載

白鳥健一 建築家「トリコSSMOSS」主宰

さあ、ビーチに行こう

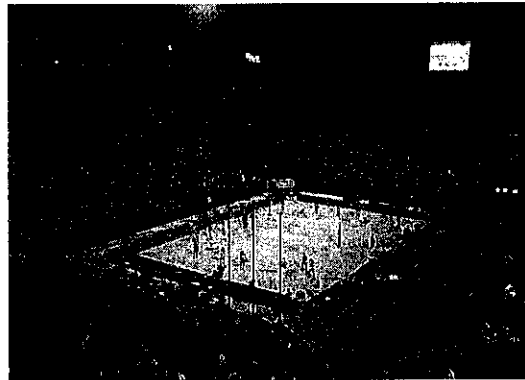
話題



「オリンピックのビーチバレー競技で、日本はアメリカに劣るチーム、男子チーム、シドニーに女子チーム、アテネに女子チーム、北京に男子それぞれチームが出場した。北京では男子チームの監督を務めたが、世界のレベルが格別して

瀬戸山氏は65年生まれ。日本体育大学卒業後、米西海岸でビーチバレーの面目を築いてきた。以来、日本のビーチバレー界で活躍。06年のアトランタ五輪に出場し、現役引退後は06年の下り、15輪と06年の北京五輪(日本代表監督として)に参加した。

「海辺を守ろう!運動」のアスリートメッセージカードと北京五輪でビーチバレー競技が行われた会場(朝陽公園ビーチバレー場)



選手や監督などとして、これまで多くの国を訪れている瀬戸山氏。国内外を比較し、ビーチバレーを取り巻く環境の違いを見ていく。

「欧米諸国などに行くと感じるのは、生活と身近なところにあるスポーツがあることだ。日本のスポーツを強くするには、選手の強化費を増やすべきだ」との意見が少なくない。確かにそれは重要なポイントだ。

「日本にも神奈川の平塚などに常設のビーチバレーコートはあるが、世界を見ると、例えばビーチバレーが発祥したアメリカではビーチに多くのコートがある。アメリカだけでなく、ドイツ、スイス、オーストリアなどヨーロッパでもビーチバレーの人気は高い。コートはビーチにあるとは限らず、街中の緑地公園にもある。16年の東京オリンピック招致に向けても、日本にビーチスポーツの国際大会が開けるきっかけとした常設スタンドを整備してほしい」と



日本ビーチバレー連盟理事長
 日本ビーチ文化振興協会理事長
瀬戸山 正二氏

ビーチスポーツの振興と海辺の環境保全を通じて、新しい文化を育んでいきたい。日本ビーチバレーボール界のバイオニア、瀬戸山正二氏はそうした目標の実現に向けてさまざまな活動を展開している。現在、日本ビーチバレー連盟とNPO日本ビーチ文化振興協会の理事長を務めるという多忙ぶりだ。今夏、北京五輪では日本代表監督も務めた。海辺から社会も環境を創り出している瀬戸山氏に話を聞いた。

海辺文化を育むために

「90年代初期から日本にビーチバレーを広めたいという思いで活動している。同時に、こうした取り組みを通じて日本のビーチを活性化させたいと考えている。日本では、8月31日に海のシーズンが終わるといってイメージがある。でも、海水浴だけでなく、日本のビーチを楽しむ方法も、外国では、日本のように「海に行く」とは言わず、「ビーチに行く」が一般的だ。それだけ、日本は陸地と海を隔て、海辺に対する感覚が薄いのかも知れない。海辺の良さは、それを活用しないところから、海辺の魅力を伸ばす必要がある。ビーチバレー、バスケット、相撲などのスポーツだけでなく、飲食や読書などもっと活用してほしい」

「それに、海辺の町町村は、海辺に住みたいと思える施設を揃えてほしい。アメリカの西海岸のように、素晴らしいビーチがある街には、人々が住みたがる。海辺は秋でも冬でも楽しめる。砂浜の空間が夏は楽しい、大事なことであるという感覚を海外でも広めたい」

「海辺の文化を伸ばすためには、環境破壊を防がなければならぬ。このため日本ビーチバレー連盟や日本ビーチ文化振興協会が協働し、今年から地球温暖化のストップに向けて「海辺を守ろう!運動」を展開している。選手たちの協力も得て、さまざまな取り組みをしていく」

「日本でもできる場所を増やすことだと思ふ。欧米では家の近くの公園にスポーツ施設が必ずあり、それを誰でも利用できる。必ずわが子どもが遊ぶところは、広場やお兄ちゃんたちが野球をしているのを、面白そうだな、おれも仲間に入れてほしいと考え、スポーツを始めた。でも、今の子どもたちはそう思える場所ほとんどない。最初にスポーツと触れ合えるのがテレビでしかないとなれば、果たしてスポーツにあこがれるだろうか。日本では今後、スポーツを楽しむ施設、環境づくりが必要だ」

「日本ビーチ文化振興協会では、一年を通じて海辺に人々が集まる環境の創造に取り組んでいる。地球温暖化による海辺の浸食防止も活動の大きな柱の一つだ」